

平成三十年度 大妻中野中学校 第二回アドバンスト入試

二月一日午後 問題用紙

# 国語

座 席 番 号
番

受 験 番 号
番
氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて九ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を記入してください。座席番号と受験番号は算用数字で記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

A

日本は①恥の文化の国だと言われるが、「恥ずかしい」とか「みっともない」というのは、僕たちにとっても馴染みのある感覚だ。

作家の司馬遼太郎は、日本文化研究者ドナルド・キーンとの対談で、日本社会に秩序があり、犯罪が少ないのは、「恥ずかしいことはするな」という意識があるからだと言っている(司馬遼太郎、ドナルド・キーン『日本人と日本文化』中公新書、一九七二年)。

たとえば、戦場で敵に後ろを見せるのは恥ずかしいことで、カッコ悪いから逃げない。鎌倉時代の武士にも、すでにカッコ悪いという感覚はあった。それは、モラルでなく美意識だ。美意識だけで社会の秩序が保たれてきた国は日本だけなのではないかという。今でも犯罪が少ないが、それは犯罪がカッコ悪いからだ。②親父の顔は潰れるし、自分も友だちに顔向けできないというだけで罪を犯さない。

恥ずかしいことはできないということだけで、社会の※<sup>1</sup>安寧秩序が保てる。その程度のことだけで安寧秩序が保てる社会というのは不思議だと司馬は言う。

「世間の目を気にする」とか「世間体を気にする」などと言うと、否定的に受け取られがちだが、「恥ずかしい」とか「みっともない」という思いは、法的に裁かれるかどうかに関係なく、自分を正しい行いに導く力になっている。

そんなことをするのはみっともない。罰せられるのが嫌だからしないというのではなく、みっともないからしない。法的には罰せられることがなくても、みっともないからしない。それは、法的に裁かれるからしないというよりも、むしろ自律的な自己規制力といえないだろうか。

日本の精神文化を世界に伝えたいという意図で、『武士道』を英文で出版した※<sup>2</sup>新渡戸稲造は、日本人にとってとくに重要なのは名誉の感覚だという。

日本人にとっては、名誉を汚されることが最も大きな恥となる。恥を知る心は、少年の教育において中心的な位置を占める。「笑われるぞ」「恥ずかしくないか」といった言葉が、正しい行いを促すときの最後の警告として使われる。このように新渡戸は、恥の意識によって名誉ある行動が導かれるとみなしている。

みっともない。恥ずかしい。それは、日本人ならだれでもしよっちゅう感じる、非常に身近な感覚のはずだ。そうした感覚によって自分の行動をコントロールする。これは、じつは他者中心の行動の律し方と言える。人の目に映る自分の姿を想像することで、「そんなのはみっともない」「そんなこともできないのは恥ずかしい」というように自分の行動を律していく。

「自分がそうしたいからする」「自分がそうしたくないからしない」という自己中心的な行動の律し方を文化と違って、③人の目を意識する心をもつことで、法的裁きを厳しくしなくても社会の秩序が保たれてきたわけだ。人の目を気にするなんて主体性がないなどという日本文化への批判は、どうも外的な気がする。自分中心の文化の※<sup>3</sup>弊害のほうははるかに大きいのではないだろうか。

自分の姿が人の目にどんなふう映っているか。僕たちは、それをたえず意識して暮らしている。社会の秩序までもが人の目を意識した自己規制力によって保たれるほど、僕たち日本人は人の目に過敏な心理構造をもっているのだ。

## B

④日本人は自己主張が苦手だと言われる。グローバル化の時代だし、もっと自己主張ができるようにならないといけないなどと言う人もいる。でも、日本人が自己主張が苦手なのは理由がある。そして、それはけっして悪いことではない。

では、アメリカ人は堂々と自己主張ができるのに、僕たち日本人はなぜうまく自己主張ができないのか。

それは、そもそも⑤日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則がまったく違っているからだ。

アメリカ人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は、相手を説得し、自分の意見を通すことだ。お互いにそういうつもりでコミュニケーションをするため、遠慮のない自己主張がぶつかり合う。お互いの意見がぶつかり合うのは日常茶飯事なため、まったく気にならない。

一方、日本人にとって、コミュニケーションの最も重要な役割は何だろう。相手を説得して自分の意見を通すことだろうか。そうではないだろう。僕たちは、自分の意見を通そうというより前に、相手はどうしたいんだろう、どんな考えなんだろうと、相手の意向を気にする。そして、できることなら相手の期待を裏切らないような方向に話をまとめたいと思う。意見が対立するようなことはできるだけ避けたい。そうでないと気まずい。

I、僕たち日本人にとっては、コミュニケーションの最も重要な役割は、お互いの気持ちを結びつけ、良好な場の雰囲気を出し出すことなのだ。強烈な自己主張によって相手を説き伏せることではない。

II 自己主張の※4スキルを磨かずに育つことになる。自己主張が苦手なのは当然なのだ。その代わりに相手の気持ちを察する共感性を磨いて育つため、相手の意向や気持ちをくみ取ることができる。

相手の意向を汲み取って動くというのは、僕たち⑥日本人の行動原理といってもいい。コミュニケーションの場面だけではない。たとえば、何かを頑張るとき、ひたすら自分のためというのが欧米式だとすると、僕たち日本人は、だれかのためという思いがわりと大きい。

親を喜ばせるため、あるいは親を悲しませないために勉強を頑張る、ピアノを頑張る。先生の期待を裏切らないためにきちんと役割を果たす。そんなところが多分にある。大人だって、監督のために何としても優勝したいなんて言ったりするし、優勝すると監督の期待に応えることができてホッとしてると言ったりする。

自分の中に息づいているだれかのために頑張るのだ。もちろん自分のためでもあるのだが、自分だけのためではない。

このような人の意向や期待を気にする日本的な心のあり方は、「他人の意向を気にするなんて自主性がない」とか「自分がない」などと批判されることがある。

## III

それは欧米的な価値観に染まった見方に過ぎない。

教育心理学者の東洋は、日本人の他者思考を未熟とみなすのは欧米流であって、他者との絆を強化し、他者との絆を自分の中に取り込んでいくのも、ひとつの発達の方向性とみなすべきではないかという（東洋『日本人のしつけと教育―発達の日米比較にもとづいて』東京大学出版会、一九九四年）。

C

関係性を生きる僕たちの自己のあり方は、「人間」という言葉にもあらわれている。

哲学者の和辻哲郎は、「人間」という言葉の成り立ちについて疑問を提起している。「人」という言葉に「間」という言葉をわざわざ付けた「人間」という言葉が、なぜまた「人」と同じ意味になるのかというのだ（和辻哲郎『人間の学としての倫理学』岩波書店、一九三四年）。

「人」だけでもいいのに、なぜわざわざ「人間」というのか。なぜ「間」を付けても意味が変わらないのか。ふだん当たり前のように使っている「人間」という言葉だが、改めてそう言われてみると、たしかに妙だ。

和辻によれば、辞書『言海』に、その事情が記されている。もともと人間という言葉は「よのなか」「世間」を意味していたのだそうだ。それが「俗に誤って人の意になった」。つまり、「人間」というのは、もともと「人の間」、言い換えれば「人間関係」を意味する言葉だったのに、誤って「人」の意味に使われるようになったのだという。

誤って使われたのだとしても、なぜまたそんな誤りが定着したのか。そこにこそ大きな意味があるのではないか。

和辻は、このような混同は他の言語ではみられないのではないかという。ドイツ語でもこんな混同はみられないし、中国語でも人間とはあくまでも世間を指し、人を指したりはしない。他の言語では「人」と「人間関係」がしっかりと区別されているのに、日本でのみ混同があるとすれば、そこには日本的な「人」のとらえ方の特徴があらわれているはずだ。

ここからわかるのは、日本文化には、「人||人間関係」というような見方が根づいているということだ。

和辻は、そのところをつぎのように説明する。もし、「人」が人間関係とはまったく別ものとしてとらえられているのであれば、「人」と「人間関係」を明確に区別すべきだろう。それなのに、日本語では「人」と「人間関係」を区別せずに、「人間関係」や「よのなか」を意味する「人間」という言葉が「人」の意味で用いられるようになった。ここにこそ、日本的な「人」のあり方が示されている。

僕たち日本人にとって、「人間」は社会であるとともに個人なのだ。

このように、日本文化のもとで自己形成をした僕たちの自分というのは、個としてあるのではなく、人とのつながりの中にある。かかわる相手との間にある。

※<sup>5</sup>一定不変の自分というのではなく、相手との関係にふさわしい自分がその都度生成するのだ。相手あつての自分であり、相手との関係に応じ

て自分の形を変えなければならぬ。だからこそ人のことが気になる。Xが気になって仕方がないのだ。

(榎本博明『自分らしさ』って何だろう？自分と向き合う心理学』による)

[注]

- ※1 安寧：世の中がおだやかで平和なこと。
- ※2 新渡戸稲造：教育者、思想家。
- ※3 弊害：害となるもの。
- ※4 スキル：技術。
- ※5 一定不変：どんなことがあってもかわることがないこと。

問一 —— 部①「恥の文化」と同じ内容を表している語句をAの本文中より十八字で抜き出して答えなさい。

問二 —— 部②「親父の顔は潰れるし、自分も友だちに顔向けできない」とありますが、この「顔」の意味を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 頭部の前面
- イ. 他人に対する栄養力のある人、また、その力。
- ウ. その集団の代表的な人物。
- エ. 面目。体面。
- オ. 様子。

問三 —— 部③「人の目を意識する心をもつことで、法的裁きを厳しくしなくても社会の秩序が保たれてきた」とありますが、このときに用いられる「人の目を意識する心」と同じ働きをする語句をAの本文中より五字で抜き出して答えなさい。

問四 — 部④「日本人は自己主張が苦手だと言われる」とありますが、日本人には自己主張ができない代わりに何を持っていると筆者は考えていますか。 **B**の本文中より三字で抜き出して答えなさい。

問五 — 部⑤「日本人とアメリカ人では自己のあり方が違っていて、コミュニケーションの法則がまったく違っている」とありますが、日本人のコミュニケーションの法則とはどのようなことですか。三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問六 文中の **I** } **III** に入る言葉として最も適切なものをそれぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア. だから                      イ. そのうえ                      ウ. だが  
エ. つまり                      オ. あるいは                      カ. ところで

問七 — 部⑥「日本人の行動原理」はどうすることだと筆者は考えていますか。 **B**の本文中より十字で抜き出して答えなさい。

問八 **X**の中に入る最も適切なものを次のア～オより一つ選び記号で答えなさい。また、それを選んだ理由を本文中の言葉を使って説明しなさい。

- ア. 人の目                      イ. 人のうわさ                      ウ. 雰囲気  
エ. 価値観                      オ. 人間関係

問九 文中の **A** } **C** には小見出しが入ります。最も適切なものをそれぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ア. 人から認められたい                      イ. 遠慮の無い自己主張がなじまない日本の自己の構造

ウ. なぜ「人」のことを「人間」と言うのか      エ. 人の目に過敏な日本人  
オ. 欧米と日本ではコミュニケーションが担う役割が異なる      カ. 自分は探しても見つからない

問十 次のア～オの中で本文の内容とあっているものには○を、あっていないものには×を解答欄に答えなさい。

- ア. 日本の恥の文化の歴史は新渡戸稲造が指摘するよりも古く、江戸時代以前から存在している。  
イ. 『武士道』を英語で出版した新渡戸稲造は「日本人にとって重要なのは、行動の律し方だ。」と言っている。  
ウ. 私たち日本人が頑張るのは、支えてくれる周囲の人々への感謝のあらわれではない。  
エ. 「人間」とは、もともと「人」という意味だったが、時代の移り変わりと共に、「世の中」という意味になった。  
オ. 日本人にとっての「自分」とは、相手との関係の中で相応しい姿に常に変化していくものである。

### 三 次の各問いに答えなさい。

#### A 漢字に関する問題

問一 次の――部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 毎日欠かさずに日記をつける。
- ② できる限りむだは省く。
- ③ 人事の刷新がはかられる。
- ④ 周囲の意見に耳を傾ける。
- ⑤ 日の光を全身に浴びる。

問二 次の四字熟語の□に入る漢字を合わせると、二字熟語ができます。できた二字熟語を答えなさい。

- ① 空□絶□ … (意味) きわめてまれであること。
- ② □名□実 … (意味) 名称・評判と実質が一致しないこと。
- ③ 針□棒□ … (意味) 小さなことながらをおおげさに言うこと。
- ④ □耕□読 … (意味) 気ままにのんびりと暮らすこと。
- ⑤ □魂□才 … (意味) 日本人の心と中国の教養を両方とも持つこと。

**B** ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の□にそれぞれ漢字一文字を入れ、意味にあう慣用句を完成させなさい。

- ① (意味) 技が上手になる。 (□が上がる)
- ② (意味) 人の幸不幸は予測できない。 (人間万事塞翁が□)
- ③ (意味) あやまちが起こりやすい状況。 (□にかつおぶし)
- ④ (意味) 驚いてきよとんとしている様子。 (はとに□鉄砲)
- ⑤ (意味) 不運の上に不運が重なること。 (泣き□にはち)

**C** 文法・言葉づかいに関する問題

問四 次の会話文は、中学一年生の大妻さんと、母校の小学校の中野先生とのものです。

会話文の中から、誤った表現を五つ探して、正しく直して答えなさい。誤った表現の文字数は、一字・四字(二か所)・七字・九字です。

大妻さん「校長先生は、今日の集会でとても面白いお話をしました。」



中野先生 「どのような話ですか。」

大妻さん 「はい、二十年後の未来のお話です。人工知能技術がもっと発達して今ある職業がみんななくなってしまふんです。」

中野先生 「それは大変なことではないですか。どうしたらよいのでしょうか。」

大妻さん 「全然大丈夫なんです。人工知能を使いこなす力を身につければいいんです。」

中野先生 「どうすればその力を身につけるのでしょうか。」

大妻さん 「校長先生は、学生である今、いろいろなことに精一杯向き合って、自分の頭で考えて行動する経験をたくさん積みあげればその力が養われると言っていました。」

中野先生 「では、毎日の学校生活が思い切り楽しんでいくことが大切ですね。いつも前向きに頑張りますよ。」





